

あ。う。る

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 35

世上に名高い「開拓使官有物
払い下げ事件」。この事件を
仕組んだのは明治三年以来、
十二年にわたって北海道開拓の
指揮をとった人物だった。

進む黒田の北海道開拓計画

明治十五（一八八二）年、北海道は開拓使時代が終わりを告げ、函館・札幌・根室の三県一府時代へと移っていくが、開拓使もあと一年足らずとなった明治十四年に一大騒動が起こった。「開拓使官有物払い下げ事件」である。

黒田清隆は、開拓次官就任直後に道内と樺太を巡視し、明治三（一八七〇）年、樺太の放棄と西洋技術の導入を骨子とした、北海道の開拓に関する建議を行った。これを受けて明治政府は、明治五年からの十年間で一千万円（実際の支出額は計画の約二倍の二〇八二万円）の財政投資を行い、北海道開拓を行うという「開拓使十年計画」を、明治四年に決定した。

黒田は、気候環境が類似し、開拓経験の豊かなアメリカから指導者を得ようと考え、同年一月に他の次官一行を伴ってアメリカへ渡り、今の大臣に相当する農務省長官の職にあったホーレス・ケブロンを開拓顧問として招いた。翌年にはケブロンの下として鉱山学者のベンジャミン・スミス・ライマンが、明治九（一八七六）年にはマサチューセッツ農科大学学長のウィリアム・スミス・クラークが招聘されるなど、多くのお雇い外国人が北海道にやって来た。

彼らの指導の下、開拓使は道路建設、河川港湾の修築、幌内鉄道などの交通機関の整備など基礎事業に着手した。農業の分野でも、外来品種と欧米農法の導入を積極的に行った。

さらに、士族を中心とした移民の勧誘と保護、対外防備を目的とする屯田兵制度、開拓の人材養成を目的とする札幌農学校の設置などを次々実施していった。これと同時にビール・ブドウ酒・味噌や醤油の醸造所、紡績、サケやシカの缶詰など、各種官営工場の設置も行われた。

この十年計画が終了する直前の明治十四（一八八二）年、開拓使官有物払い下げ事件が起きた。

黒田の企み

開拓使十年計画の終了に伴い、開拓使の廃止期限である明治十五年一月が迫ってきた。しかし黒田は廃止に反対で、開拓使の存続を主張した。まだ北海道の開拓は不十分というのがその理由だ。明治十三年に工場払下概則が施行され、周りのプレッシャーも強まり、次第に黒田も廃止に同調するようになる。しかし、黒田は開拓使の



開拓長官 黒田清隆
（国立国会図書館ウェブサイトより）

いろいろな事業を存続させるために一計を案じていた。会社を一つつくり、この会社が開拓使官有物を一括払い下げするというプランだ。

明治十四年七月二十一日、開拓使大書記官安田定則が同僚の権大書記官鈴木大亮、同金井信之、同折田平内と新会社を設立するので、そこにぜひ開拓使の官有物の払い下げを、と太政官に出願した。これには黒田の伺書も添えられていた。

この中に、黒田愛用の玄武丸や札幌の牧羊場、真駒内牧牛場、ホップ園、桑園と蚕

室、麦酒醸造所、葡萄酒醸造所、葡萄園という主要な施設や工場がすべて含まれていた。しかし、将来的に見込みのない製網所や製糸場、木工場などは外されており、非常に計算高い選り方をしていった。

黒田は伺書で、開拓使の主旨の継続と人材の点で「一挙兩得ノ処置」と評価しているが、どうみてもこれは黒田自身の仕組んだものだった。

安すぎる払い下げ価格

しかも払い下げ価格があまりにも安かった。希望価格は約三万七〇八二円、支払いは三十年期限で無利子、このほか、約四万二五〇〇円を年利〇・五パーセント、五年返済で貸し付けてほしいという内容だった。当時の実勢価格で三〇〇万円はするといわれていたのに、この額。あまりにも虫のよい内容であった。また入札も行わず、一社のみに優遇措置をしていることも問題であった。

この願書・伺書の内容が七月二十六日「東京横浜毎日新聞」にスクープされ、翌日「郵便報知新聞」も追従。その後各紙が一斉に糾弾キャンペーンを開始した。

同月二十八日の閣議でこの問題が討議されたが、参議大隈重信らの反対にもかかわらず、払い下げが許可されてしまった。黒田はマスコミに知れ渡ったため、早く決着をつけようと三十日には強引に勅許も得た。

マスコミはその後毎日この問題を取り上げたため世論は沸騰、各地で開催される政談演説会はどこも大入りとなった。

静かだった札幌

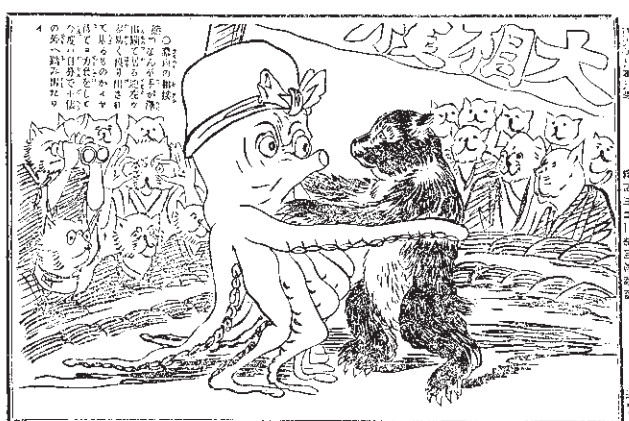
結局この後、開拓使の官有物払い下げは、世論や政府部内の激しい非難により、十月十二日に取り消されることとなった。岩倉具視や伊藤博文は事態を收拾するため、大隈派を政府部内から一掃し、黒田派を慰留。一方民権派対策として、明治二十三年を期して国会を開設する勅諭を出し、事態を沈静。いわゆるこの「明治十四年の政変」により、官有物払い下げ問題は決着した。

日本を揺るがす大事件だったにもかかわらず、官吏や開拓使と取引のある商人が多かった札幌は、表立って批判しにくい環境にあったのか、いたって静かだったという。

沸騰する世論

しかし札幌は

静かだった



「幕内の相撲」『団団珍聞』明治14年10月22日号（国立国会図書館蔵）
「開拓使官有物払い下げ事件」の風刺画。タコが黒田清隆、クマが大隈重信を表している

あうるの杜

画家
佐藤 武さん

Interview

荒涼とした大地に廃墟が広がる絵画など、夢幻的な風景を描く画家であり、詩集・写真集・エッセイ集も出版する多彩な佐藤武さんのあうるの杜です。

小学校〜職業訓練所

小学四年生のとき、授業で学校から見える「樽前山」を描いたんですが、それがすごくいいと言われた。小学校の新校舎が落成したので、そのお祝いに僕の絵を額装して寄贈したら、お礼に油絵のセットをもらいました。油絵を描いていた音楽の先生が、「僕が教えてあげるから一週間に一回、家に来なさい」と言ってくれた。教わっているうちに「うまい」と褒められるので、「僕って絵が上手なんだ」ということに気がつきました。

絵を描きたくて高校を一年で中退し、千歳から札幌に。鍍金塗装の会社で働きながら、札幌事業内高等職業訓練所に四年間通いました。昼間は仕事をし、午後六時から一〇時半ぐらいまで授業を受けた。卒業してから、将来に役立つからと先生に勧められて、訓練所指導員の資格も取りましたが、画家になりたくて、なりたくて。

道展入選〜東京へ

一七歳の時に道展に入選しました。翌年、東京で日本文化フォーラムの国際青年美術家展があったので応募したところ、これにも入選。審査員は日本の有名な評論家三人でしたが、実はこの絵、道展では落選した絵だったんです。「北海道の審査員は見る目が無い。こんなところで絵を描いていたらだめだ」

応援者

初めて絵が売れたのは、美術センターの休暇をもらい、札幌時計台ギャラリーで個展を開いたとき

佐藤 武
さとう たけし

1947年千歳市生まれ。11歳より独学で油絵を始める。1967年に初個展(以後毎年札幌を中心に開催)。
■主な受賞歴
1987年/第5回上野の森美術館絵画大賞展 特別優秀賞(箱根彫刻の森美術館賞)
1988年/北海道の美術「イメージ動」(北海道立近代美術館賞)
1991年/第4回時計台文化会館美術大賞展(国松登賞)、第6回東京セントラル美術館油絵大賞展(佳作賞)
2002年/第11回青木繁記念大賞展(優秀賞)
2009年/紺綬褒章 受章
■作品収蔵美術館
上野の森美術館、北海道立近代美術館、カナダ国学士院、札幌芸術の森美術館



悠久の時・朽ちる大地・夢幻の風景を描く



でした。美国でマグロの定置網を専門にやっている網元が来て、絵を見て「これとこれとこれ……」と。「エーッ、この人何者なんだ? かわかっているんじゃないのか?」と思いました。絵の値段を尋ね、毛糸の腹巻きから札束を出し、支払いをして去って行った。それからの付き合いで、札幌で展覧会をやれば必ず来てくれて四点か五点は買ってくれました。美国まで絵を届けに行くと、帰りに小ぶりのマグロを一匹お土産に持たせてくれましたが、小ぶりといっても何十万円もするマグロでした。

描いていたりしていたんですが、正月に実家近くで通り魔に棒で頭を殴られて骨が陥没し、七針縫うという被害に遭った。四カ月後に時計台ギャラリーで個展を開くことになっていたので、退院してから一気に一点ぐらい描きました。全部一条の光が当たって建物ガラガラと壊れたようなもの。入院中にひらめいたアイデアです。その絵を見た荒巻さんが「武さん、これだ、これ! 頭殴られたおかげで良くなったね」って。

描いた絵は三〇〇点以上

札幌芸術の森美術館にある僕の絵は寄贈したもので、自分の作品を九点寄贈したら紺綬褒章をいただきました。今は全部で一点ぐらい収蔵しています。

北海道立近代美術館には、あそこの企画展覧会で最高賞をとった一五〇号の絵が一点収蔵されていますが、三月二日まで行われている「近美コレクション」でその絵を見ることが出来ますよ。

個展は今年の一月一日から「さいとうギャラリー」で開きます。昨年洞爺湖芸術館に出品した屏風の絵を札幌の人はほとんど見ないのでも出品し、大きい絵も四〜五点出すつもりです。

最初の頃はインドの塔を普通に

「思つて」を言います

昨年、世間の耳目を集めた森友学園問題の証人喚問など、国会質疑の中で違和感を覚えた言い回しがあります。

それは「思つて言います」という表現です。この言葉の洪水でした。

これつて、とても丁寧な言葉遣いをしているつもりなのでしょうが、「言います」は「ある」の丁寧な表現なので間違いなのです。「思つて+ある」という言葉などないからです。「思っているの言います」「思っているところで言います」が正しい言い方でしょう。

「とても言いません」というのも、つい使つてしまいがちですが、これもかつては間違つた言い方とされてきました。

「とても」に「ない」の付いた形が「とてもない」ですが、元々「とてもない」は「途でもない」の転じた言葉で、「一語と見るのが正しく、「とても」が単独で使われた例はありません。とすれば、「ない」を切り離して「ありません」「言いません」と丁寧に表示するのは不適切で、「とてもないこと」です。「とてもないこと」で言います」と言わなければならぬのです。しかし最近「とてもありません」「とても言いません」と言う人が多くなっています。

二〇〇七年の文化審議会答申「敬語の指針」でも、相手からのほめ言葉に対して謙遜しながら軽く打ち消す表現として「とても言いません」「とてもありません」を使つても、現在は問題ないとしています。

ただ「とてもない」には「もつてのほかだ」と強く否定する意味もあり、「とてもないこと」で「言います」を使う場合は注意が必要で、「指針」では述べていますから、皆さん気をつけてください。

OWLINFORMATION

とりどりの「書」が集う北海道最大級の公募展

第60回記念北海道書道展

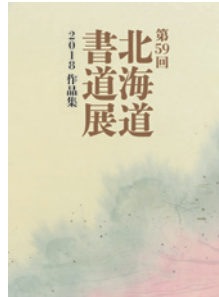
北の書作家2019(招待・会員) 4月24日(水)～28日(日)
公募展 4月30日(火)～5月5日(日・祝)、会友展 5月3日(金・祝)～7日(火)
会員・公募展:札幌市民ギャラリー(札幌市中央区南2条東6丁目 TEL011-271-5471)
会友展:札幌パークホテル B2Fパークプラザ(札幌市中央区南10条西3丁目 TEL011-511-3131)
開場時間/10:00～18:00(最終日は16:00まで)
入場料(3展覧会共通券)/当日500円、前売300円、高校生以下無料

1960年に創設され、北海道最大規模の書道公募展として「道展」の名で書家に親しまれている北海道書道展。今年で60回の節目を迎える同展は、招待作家・会員作品が展示される「北の書作家展」と「公募展」を札幌市民ギャラリーで、「会友展」を札幌パークホテル内のパークプラザで開催する。3つの作品展と2つの移動展で構成されています。60回目となる今年はさらに、北海道立近代美術館で招待会員や会員の作品による記念展を開催する予定です。

同展は招待会員、会員、会友約870名

を擁し、招待作家の中野北渙氏をはじめ、国内で評価されている書家も少なくありません。また、一般公募部門にも約1,300点の出品があり、北海道書道の担い手たちが腕を競い合う場となっています。

絵画や彫刻といった美術展に比べると開催期間の短い書道の展覧会ですが、3期にわたり作品が集うこの機会に、力強い「漢字」やたおやかな「かな」、言葉の構成でみせる「近代詩文」、墨の濃淡がアーティスティックな「墨象」、木や石の限られた空間に文字を刻む「篆刻・刻字」と、幅広く奥深い書の世界をお楽しみいただけます。



昨年の作品集

まちづくりのあゆみがわかる記念誌

千歳市おさつ駅みどり台土地区画整理事業事業完成記念誌

千歳市おさつ駅みどり台土地区画整理組合・編非売品

北海道千歳市の中心部から北西に位置する長都地区に進められていた土地区画整理事業の完成に際し、一冊の記念誌が編まれました。18年にわたる組合のあゆみからは、デフレで宅地販売が進まず、経営危機が続いた当初の状況や、工夫と周囲の協力で立ち直り、ひとつの「まち」が生まれるまでの苦労がうかがえます。また明治以前からのまちづくり前史も紹介。湿地を農地とし、さらに住宅地へと変貌を続ける地区の開拓史でもあります。



千歳市おさつ駅みどり台土地区画整理組合
A4判、52頁
2018年12月発行

北海道150年の歴史を記憶に留め、次代へと伝える

北海道命名150年記念

ほっかいどう百年物語 上巻

STVラジオ・編

定価:本体1,200円+税

北海道のラジオ局で、約20年にわたり開拓期から今日に至るまでの先人たちの人間ドラマを紹介してきたラジオ番組「ほっかいどう百年物語」。その書籍化シリーズは全10巻で一つの区切りとなっていました、「北海道命名150年」を記念し、第10巻発売以降の2010～2017年に放送された原稿の中から厳選した、上下巻の特別編集版を刊行します。

昨年末に発行された上巻には20編の物語を収録。生涯を相撲に捧げた大横綱・北の湖敏満をはじめ、道内屈指の建設会社を作り上げた伊藤亀太郎、今も文化財として残る時計台や豊平館を設計した安達喜幸のほか、「晩成社」の一員として十勝へ入植した鈴木統太郎など開拓者たちも掲載。北海道農業の礎を築いたお雇い外国人ルイス・ペーマーや、釧路漁業をもち立てた嵯峨久、障害者福祉に人生を捧げた南雲総次郎や高江常男など、郷土に根ざし、時代を生き抜いた人々を道内全域から取り上げています。



中西出版
四六判、339頁
2018年12月刊行

札幌発の絵本シリーズに最新作とぬりえが登場!

おばけのマールとしろ

なかい れいえ

けーたろう・ぶん

定価:本体1,200円+税(ぬりえ版は本体400円+税)

札幌の円山に住むかわいなおばけ、「おばけのマール」シリーズ第8弾! マールとシロはいつもなかよし。どこにいくにもなををするにもいつでもふたりはいっしょです。ある日ふたりは、こおりのみずうみにでかけましたが……。

今回はいつもと雰囲気を変えて、小さなお子さんでも手に取りやすい、少し小さなサイズの特別な絵本です。マールと一緒にシロを探してたくさん景色に出会いながら、大切な人のことを家族みんなで話してみませんか。

また、シリーズ初の試みとして、絵本と同じ原画を使った「ぬりえ版」を同時発売。おはなしの一部分が空白になっていて、自由な発想で色とことばをつけた、自分だけの「マールとしろ」を作ることができます。

さらに2月下旬には、第9弾の『おばけのマールとたのしいオーケストラ』を発売予定。マールがコンサートに出かけ、札幌交響楽団の奏でる音楽の魔法を楽しみます。



中西出版
A4変形判、32頁
2018年10月刊行

